

# Portfolio 2025

Chika Inagaki



# CV

## 稲垣 千佳 (いながき・ちか)

2001 年、神奈川県川崎市生まれ。

9 歳より行ってきた打楽器の演奏を原体験とし、リズムに関する創作活動を行う。特に、規則的に反復される運動とそれに対するぶれや揺らぎをリズムの発生源と捉え、インスタレーション、パフォーマンスなど様々な形態での表現を展開している。

2022 年 5 月より、「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」がまちの文化サロンとして運営する拠点「仲町の家」に共同管理人として滞在し、NPO 法人音まち計画事務局と協力しながら家の管理や運営の補助を行っている。

2024 年 東京藝術大学美術学部美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻 入学

2024 年 東京藝術大学音楽学部 音楽環境創造科 卒業

## Exhibition

### Solo

2022 Mar. NAKACHO ART SERIES #6 rhythmos (仲町の家 / 東京)

2023 May Homecoming (仲町の家 / 東京)

### Group & Others

2024 Feb. 音楽環境創造科卒業研究発表会

2022 Dec. 千住 Artpath 2022 (東京藝術大学千住校地 / 東京)

Sep. 第 57 回神奈川県美術展 (神奈川県民ホールギャラリー、横浜)

Sep. 藝祭 2022 有志展示 東京藝術創成科 3 年展「舐れる」(東京藝術大学上野校地 / 東京)

Mar. NAKACHO ART SERIES #6 rhythmos (仲町の家 / 東京)

Feb. (Sound) Interaction2022 (O 美術館 / 東京)

2021 Sep. グループ展 「En」(工房親 / 東京)

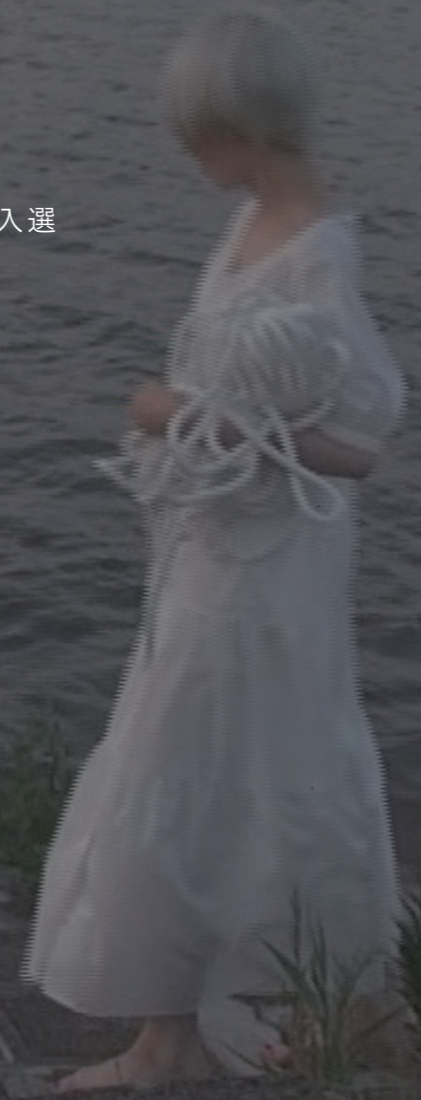
Aug. 交流と接地 (Senju Motomachi Souko / 東京)

## Award

2022 第 57 回神奈川県美術展 平面立体部門 入選

## Grant

2023 武藤舞奨学金



# Works

日常の中でふと感じ取る「リズムカル」なものたちを題材に表現を行う。

左右の足を交互に動かし歩くとき。階段を上り下りするとき。ボールが弾むとき。踊るとき。幾何学的なパターンの連続を目にしたとき。こうした瞬間に感じる「リズム」の正体を、研究を通して明かしつつ、その隙間でこぼれ落ちてゆく言語化できないような感覚を表現の中に落とし込む。作品の根底には、リズムの普遍性、リズム感覚の共有、リズム概念の拡張があることが多い。

また、仲町の家での滞在生活をきっかけに場に対して応答する表現にも取り組んでいる。場の持つ空間的特性・文脈などをリサーチしたうえで自分なりの視点で空間に干渉する。作品と場とのせめぎ合いから得られる感覚は、セッションで感じる興奮に近い。恐れと期待とが入り混じるなか、作品が場によって自身の思いもよらぬかたちに変容するのを毎回眺めている。

ところで、リズムの語源にあたる *rhythmos* という単語は、文字や衣服の形状のような「空間内の要素の配置が変容しつつもある一定のかたちを保っている状態」を意味する。作品の緩やかな変容もまた、リズムであると言えるだろう。




Ars Manus



Homecoming



滔滔



刻刻



Poly Bounces



Menuet Physique

# Ars Manus

2024

オーガンジー、導線、LED、刺繍針、刺繍枠



刺繍、編み物、裁縫といった手仕事には、リズムが宿る。

これらの手仕事には、手の動作の反復が含まれる。

自分の意思で手を動かしている感覚と、素材や道具に手を動かされる感覚。

互いが往還の末に混ざり合い、次第にエネルギーの緩急を生み出す。

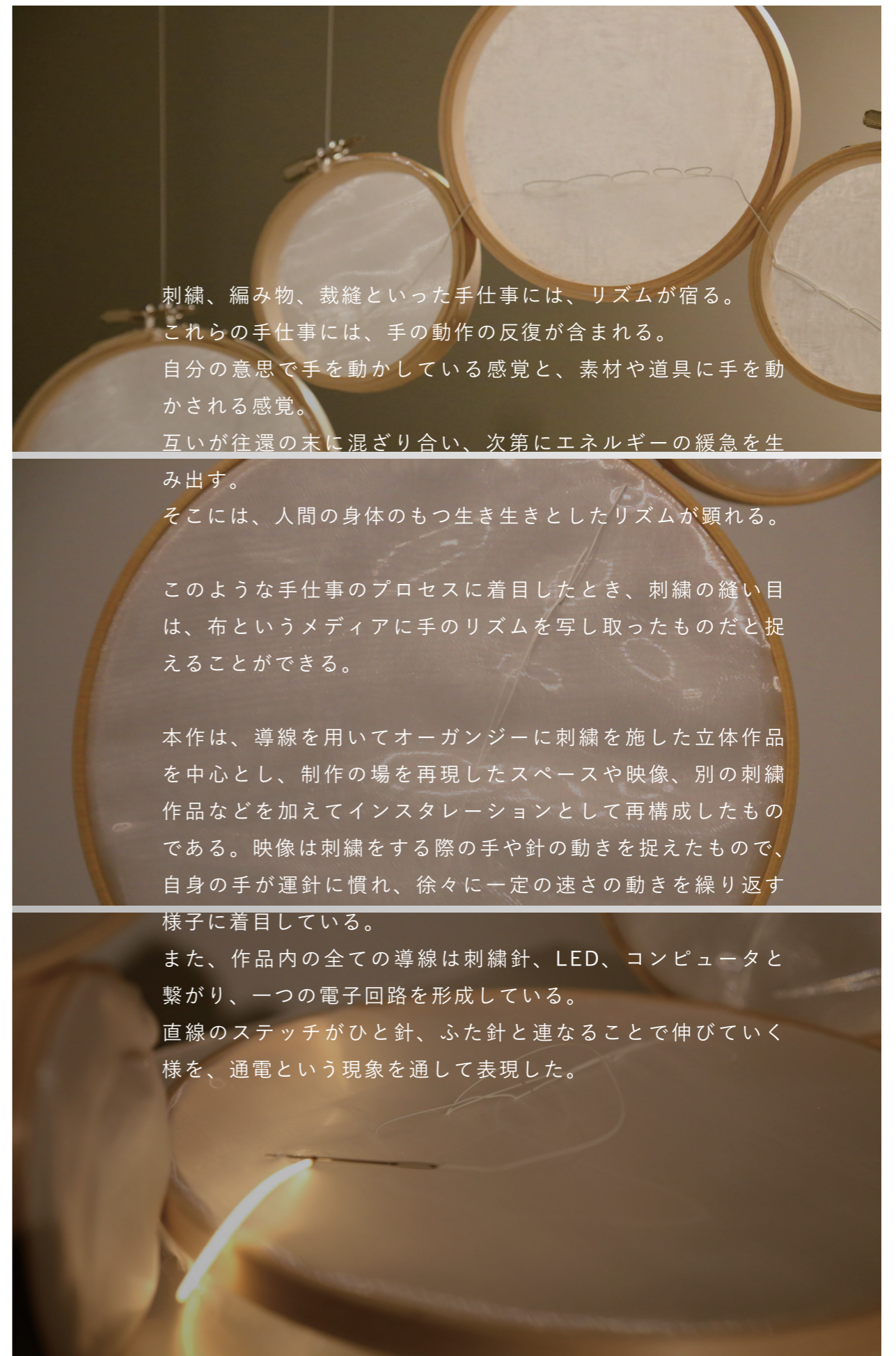
そこには、人間の身体のもつ生き生きとしたリズムが顕れる。

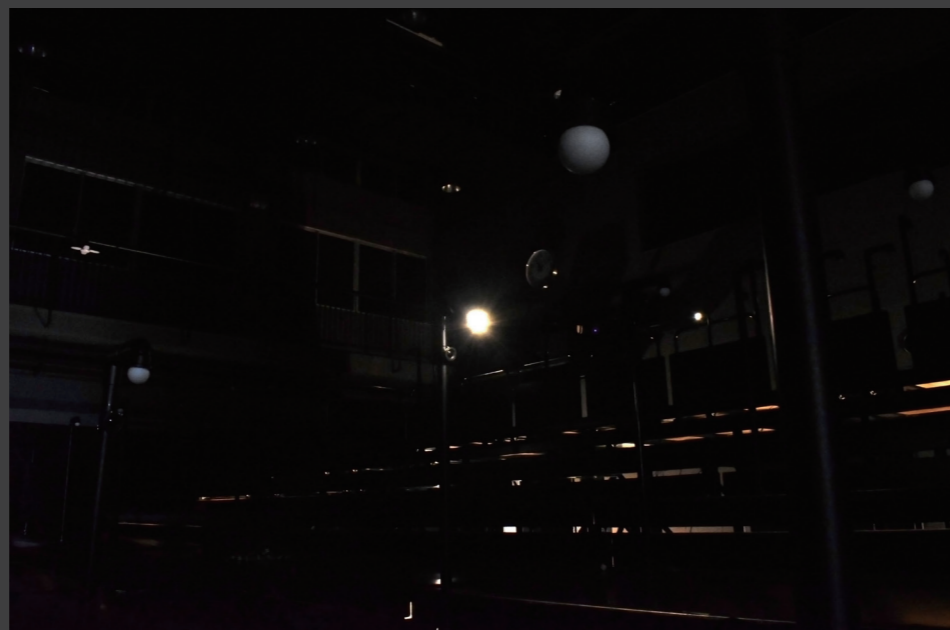
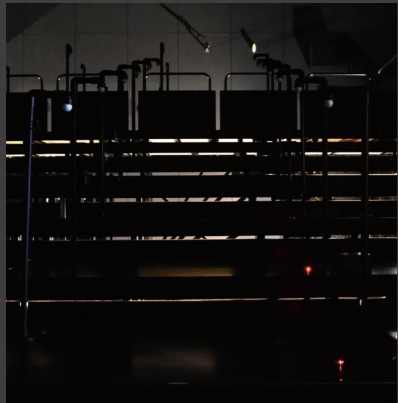
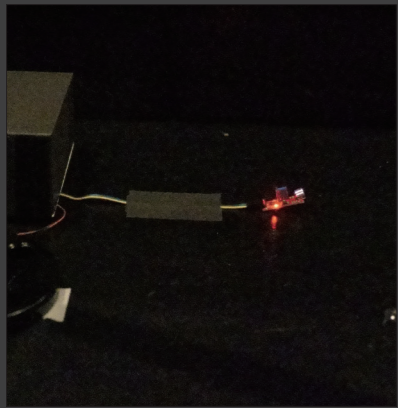
このような手仕事のプロセスに着目したとき、刺繍の縫い目は、布というメディアに手のリズムを写し取ったものだと捉えることができる。

本作は、導線を用いてオーガンジーに刺繍を施した立体作品を中心とし、制作の場を再現したスペースや映像、別の刺繍作品などを加えてインスタレーションとして再構成したものである。映像は刺繍をする際の手や針の動きを捉えたもので、自身の手が運針に慣れ、徐々に一定の速さの動きを繰り返す様子に着目している。

また、作品内の全ての導線は刺繍針、LED、コンピュータと繋がり、一つの電子回路を形成している。

直線のステッチがひと針、ふた針と連なることで伸びていく様を、通電という現象を通して表現した。





# Step by Step

Installation, 2024 (東京藝術大学 千住校地 第7ホール)

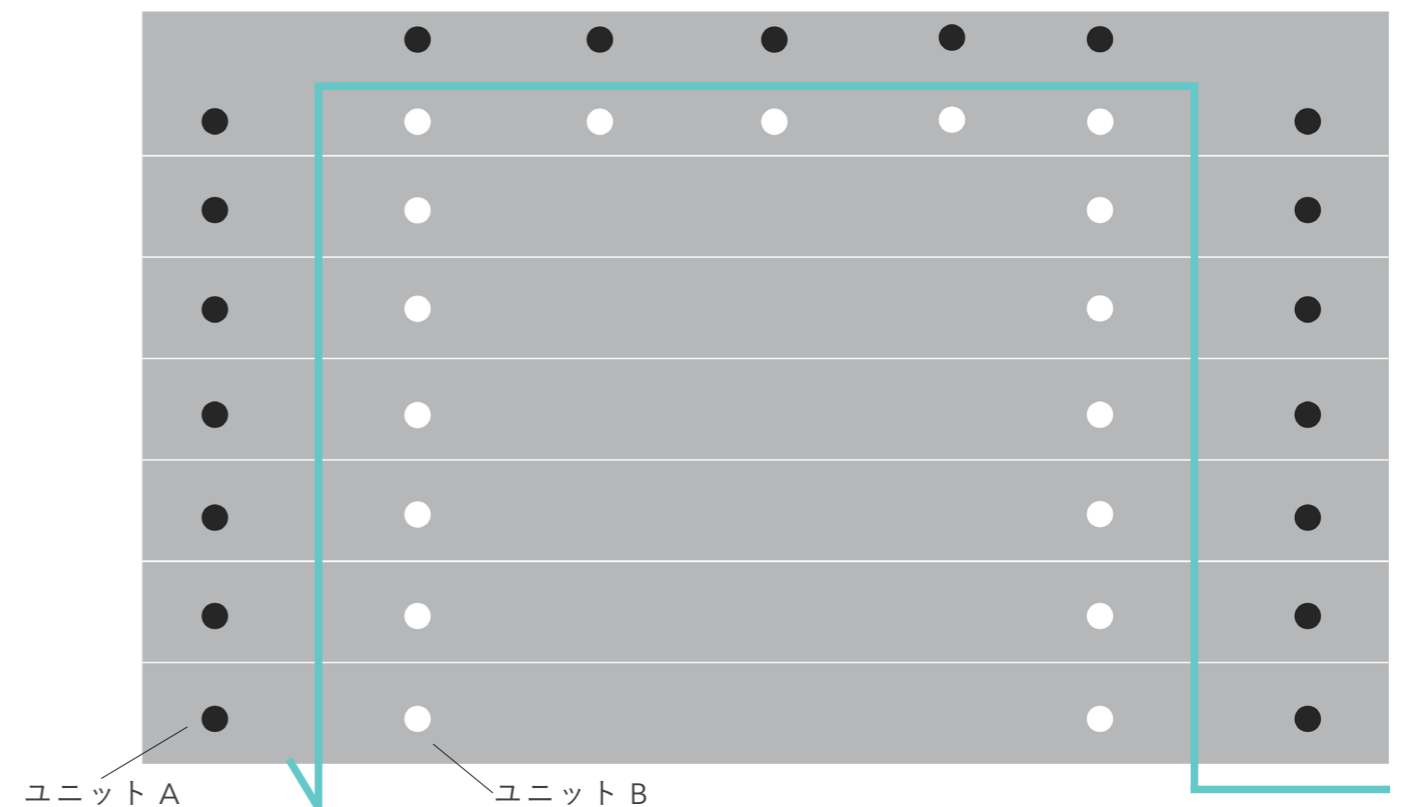
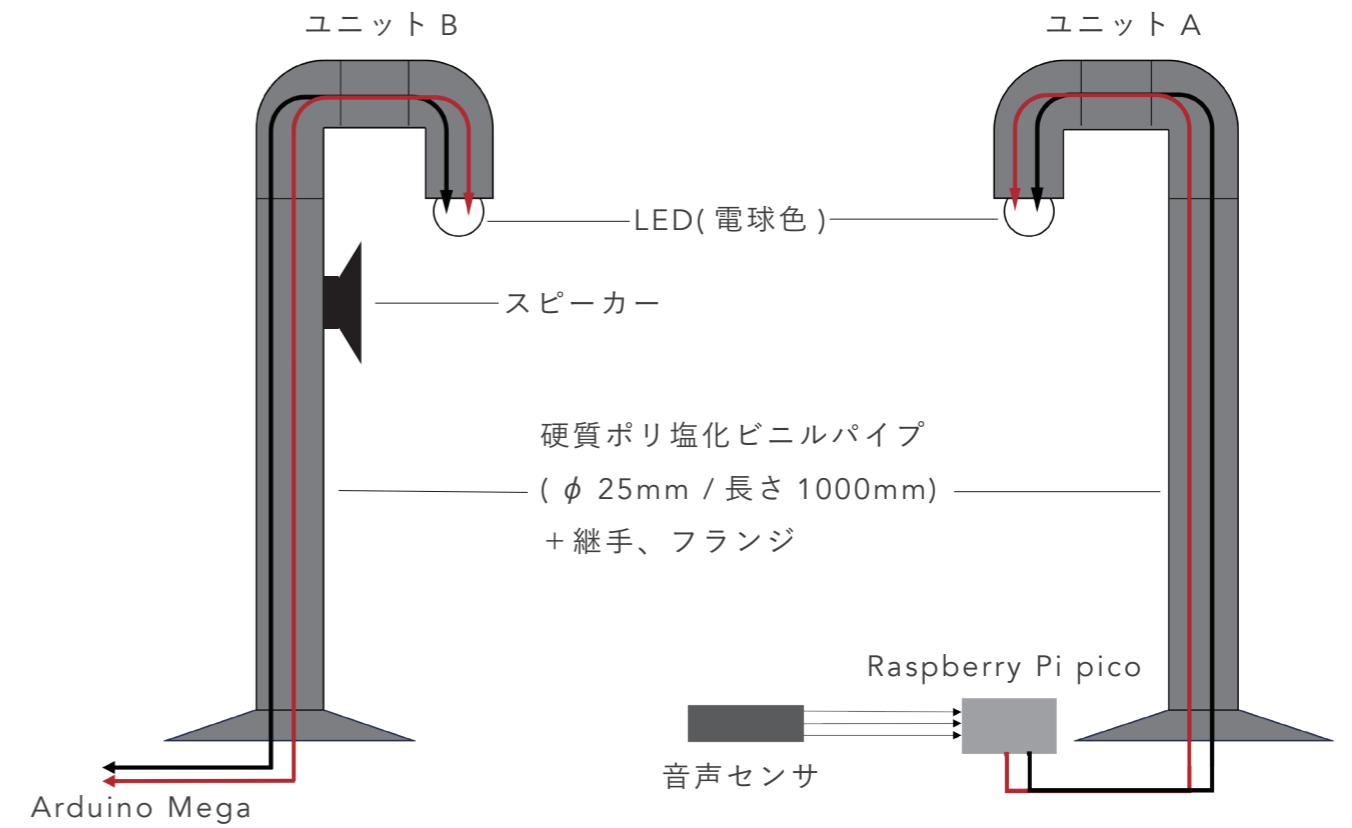
# Step by Step

2024

硬質ポリ塩化ビニルパイプ、LED、ピンポン球、音声センサモジュール、Raspberry Pi Pico、Arduino UNO  
サイズ可変

階段を上り下りする際の身体感覚に着想を得た作品。壇上に二種類のオブジェクトが設置されており、鑑賞者はその間を通過して進む。順路の外側に置かれたユニット A は鑑賞者の足音に反応して LED が点灯する一方、内側に置かれたユニット B は定期的に光と音(サイン音)を発する。

階段 (step) を踏むことで身体の内部で感じ取られるリズムと、空間に設置されたオブジェクトによって身体の外部から規定されるリズムはどのように混ざり合うのか。鑑賞空間という非日常的な、やや緊張感をはらんだ場で、そうしたリズムはどのように知覚されるのか。身近な体験を抽象化し展示空間に持ち込むことで鑑賞空間におけるリズムの知覚について探究した。音楽環境創造科学部卒業制作。



# Homecoming



## 展示概要

会期：2023年5月27日(土)～6月12日(月)

会場：仲町の家(東京)

パフォーマンス公演日：6月10日(土)、6月11日(日) 各日14:00～

パフォーマー：稲垣千佳、宮垣輝希、村瀬芽生

主催：稲垣千佳

※本企画は「アートアクセスあだち 音まち千住の縁 拠点形成事業 パイロットプログラム」の一貫で実施した。



江戸時代に商家の離れとして建てられ、時代を経て異なる表情を見せてきた仲町の家。その時々で家屋と人間の関係も変化してきた。

本企画では、自身の仲町の家での滞在生活から着想を得た「暮らしの身ぶりと演奏の身ぶり」というテーマから作品展示とパフォーマンスを行った。

生活の中で得た気づきと自身の創作のテーマである「リズム」を融合させ、家に関わるさまざまな立場の人間にスポットを当てた作品群を発表。

\* 仲町の家とは

音まちの活動の足場としている「仲町の家」は、千住仲町エリアにある戦前に建てられた日本家屋。千住のまちをつくった祖先のひとり、石出掃部介吉胤いしでかもんのすけよしただねのご子孫が大切に守ってこられた美しい日本家屋と、緑あふれる庭が広がる情緒深い空間です。

(アートアクセスあだち 音まち千住の縁 ホームページ <https://aaa-senju.com/nakachohouse> より)

# 組曲 《Homecoming》

2023

パフォーマンス (約 40 分)

滞在中に得た気づきと、作家自身の創作のテーマである「リズム」を融合させた、全5曲からなる作品。パフォーマンスには作者の稲垣に加え、二人の打楽器奏者が参加。指示は楽譜の形で書かれており、曲により1～3人のパフォーマーがリズムアンサンブルや身体表現を行う。

公演日：20236月10日(土)、6月11日(日)

パフォーマンス：稲垣千佳、宮垣輝希、村瀬芽生

## I. 「ただいま」

誰もいない部屋に「ただいま」と言ってみる。

微かに感じる気配は心象のものか、それとも……？



## II. ハレの日

家に人々が集う、ちょっと特別な日。祝祭にちなんだリズムを宴の中に詰め込んだ一曲。



## 間奏曲 虫、或いは修羅

迷い込んできた「虫」を捕まえようとする。

生物としての虫と内的なバグが混ざり合い肥大化していく。

## III. 仕度

「Homecoming」に向けて設営を行う。実際に展示していた「Composition #1—Shoji—」をパフォーマンス前に外し、パフォーマンス内で再設置した。



## IV. 終曲 Homecoming

家屋と人間の関係はその時々によって移ろってきた。

いまもまた、この場で新たな「Home」が生まれようとしている。



# 東南東の窓

2022-2023

オーガンジーにインク、木枠（455 × 380cm）；サイズ可変



仲町の家の2階にある東南東に向けた窓から風景をなぞり描きしたドロ잉の集積。庭に生える木や隣家の位置などは変わることは無いものの、その日その時間ごとの日当たりや布の置き方によって写し取れる風景に微妙な差異が生じる。一つの風景に対するまなざしの揺らぎ、記憶の集積から生まれる曖昧なイメージをテーマとした。

# Composition #1 —Shoji—

2023

木材、塩化ビニル板 \*下図左側



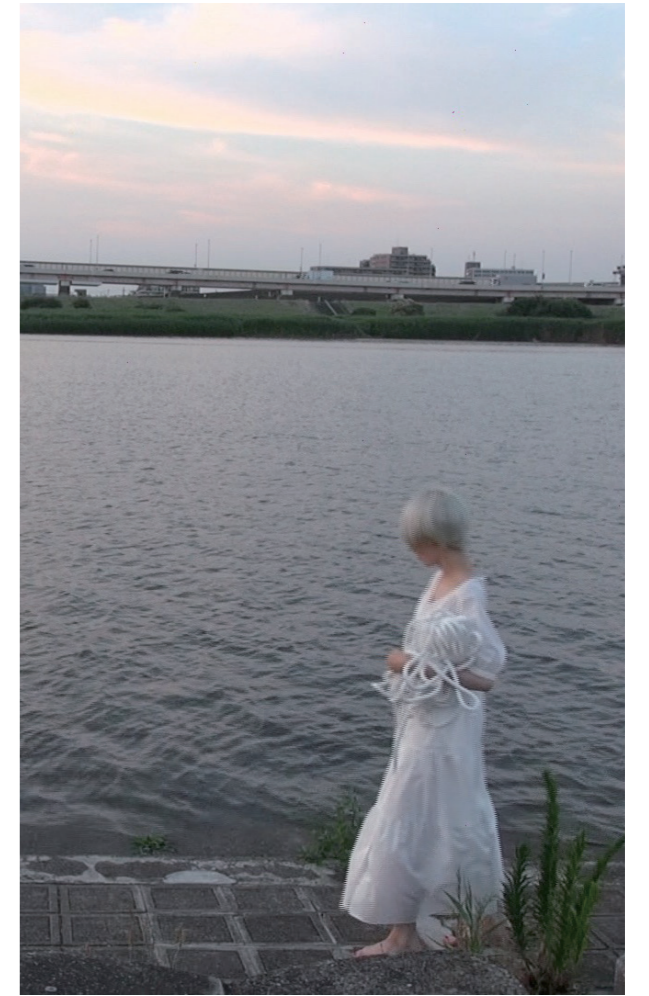
個展「Homecoming」(2023)に際して制作。会場の仲町の家の鴨居・敷居に寸法を合わせ、「家屋にはめ込む打楽器」をコンセプトとした。一般的な障子は薄い紙が張られており、叩くと破けてしまう。障子に限らず、日本家屋では建具を傷つけないよう慎重な振る舞いが求められるが、本来建具は生活空間の中に自然と溶け込んでいるものだったはずだ。

そうした「暮らしの隣人」としての建具を再現し、誰でも触れる・動かせる作品に仕上げた。

# 成らむと欲す

2022-2023

映像 (4 分 37 秒)、布団



川と一体化したい、という欲望を実現しようと試みたパフォーマンスの記録映像。白い縄を身体に巻きつけ川の水に浸したり、濡れた縄を再び身体に巻きつけたりと、縄を介して川と接続しようとする。(2022年制作の映像部分)

2023年、個展に合わせて改作した際に「白昼夢」と題し、天井に投影された映像を布団に寝転んで眺める鑑賞形態を取った。

映像リンク：<https://youtu.be/7RWwAJZt6Xo?si=pUXcl97xnmE7xuvu>



# 滔滔

2022

アルミニウム、テグス、モーター  
サイズ可変

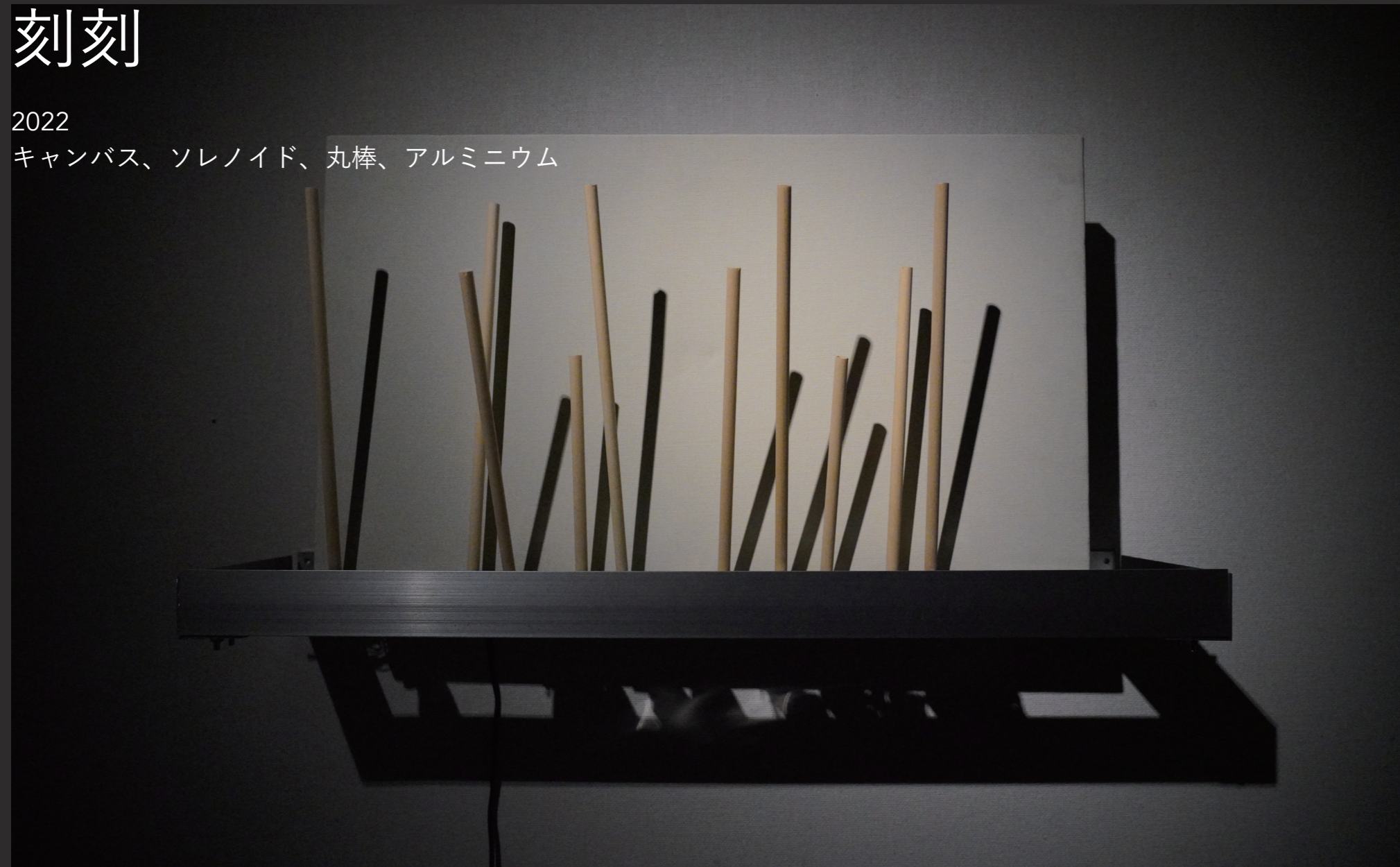


仲町の家から歩いて10分ほどのところに千住大橋がある。滔滔と流れる隅田川に架かったこの橋は、まちの内と外を繋ぐ玄関口となっており、今も昔も往来が絶えない。川の流れをよく見ると一方向ではなく、波のような動きを見せる。流れていくような、いかないような、絶妙な緩急にはリズムが宿っている。本作では、庭の池に架かる石橋を千住大橋と重ね、川の流れのリズムをモチーフとした。

# 刻刻

2022

キャンバス、ソレノイド、丸棒、アルミニウム



一つの周期を複数のパターンで分割し重ね合わせることでポリリズムを生成する。

また、キャンバスを膜鳴打楽器とみなし打ち鳴らす。横幅は周期の長さに対応しており、周期の分割点にスティックを配置している。

リズムはパルスのグループ化によって知覚される。しかし、楽譜に記す際はあらかじめ定められた周期に基づき最小単位が割り出される。記譜とは言わば運動を分割し把握しやすい記号に変換する行為で、記号化されたリズムは演奏によって運動へと再変換される。本作品では、記譜への応答として周期の分割によって組んだプログラムを運動に変換し、自動演奏の可能性を探る。

第 57 回神奈川県美術展 平面・立体部門 入選作品。



## Poly Bounces

2021

ピンポン球、アクリルパイプ、モーター、送風機、エアホース、木材  
Max/MSP、Arudino

アクリルパイプの中にあるピンポン球が、送風機からの風圧によって上昇し、板で風が遮断されることで落下して弾む。

球のバウンドは、落下、接地、跳ね返りを繰り返す運動である。一連の動きが反復されながら徐々に静止に向かって動きが小さくなっていく。

本作品ではこの運動を一つのリズムと捉え、音楽という限定的な場面での「リズム」とは異なる視座からリズムを見つめ直すとともに、複数のバウンドを同時多発的に発生させることでポリリズムの定義を拡大させることを試みた。

# Menuet Physique

2021

オーガンジー、アクリル絵具



Menuet(メヌエット)はバロック時代の宮廷で踊られていた舞踏で、宮廷文化が廃れた後も舞曲の様式の一つとして定着し、多くの音楽家に作曲された。現代では踊られる機会より演奏される機会のほうが多いメヌエットだが、そのリズムは身体の動きと切り離せない。

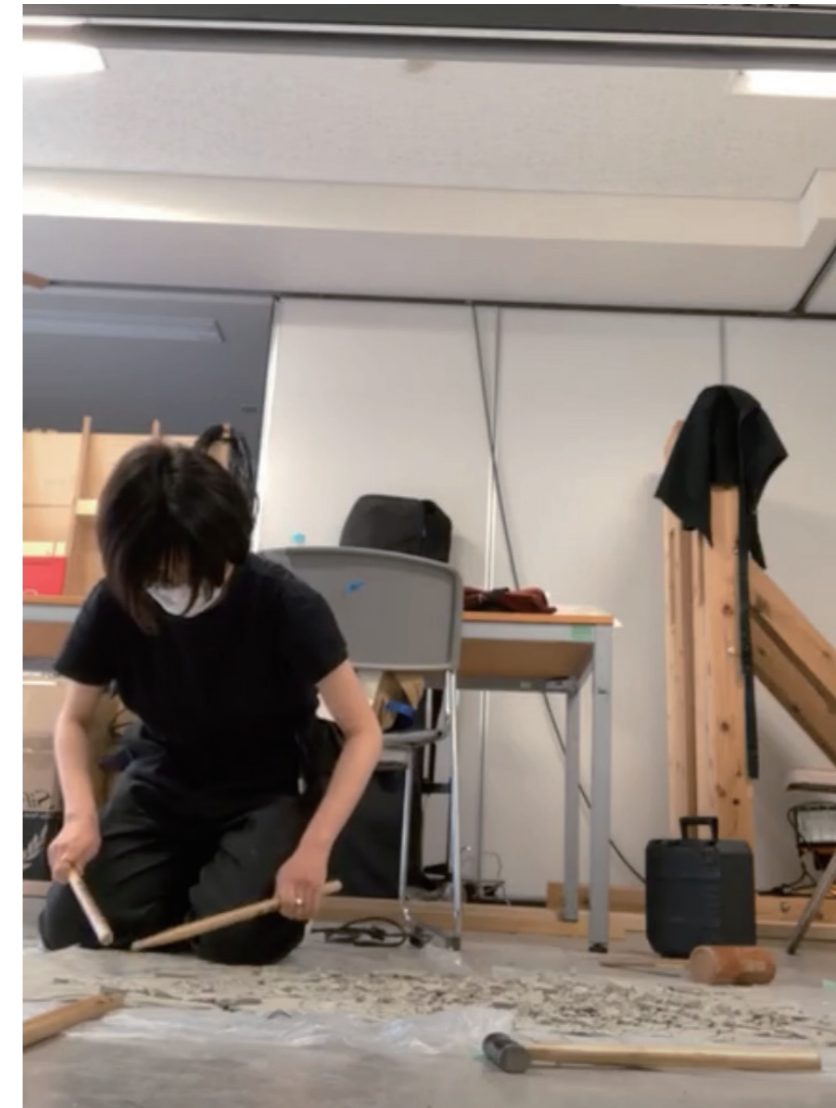
本作品では実際にメヌエットを踊り足型を粘土で取った後、窪みにスポンジや筆を押し当てることで布にステップを写し取っている。伝統的な西洋音楽の記譜法では記せないステップ間の重心移動や拍の持つ重さを記すことをテーマとした。



# そして土は還る

2021

パフォーマンス(11分17秒)



インスタレーション作品《Menuet Physique》の制作に使用し日数を経て硬化した粘土を、即興で打奏し、破壊する。

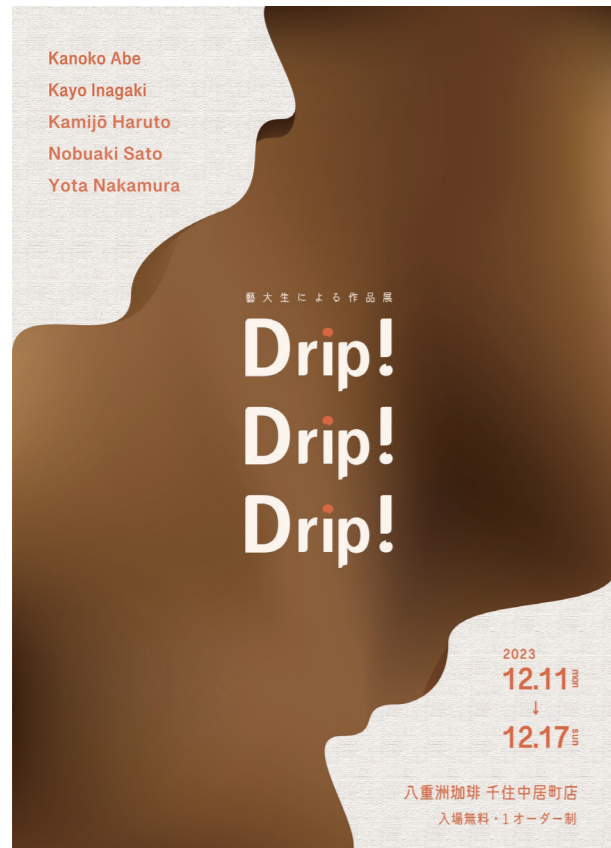
《Menuet Physique》はメヌエットを踊った足跡を、オーガンジー素材の布にアクリル絵具で写し取って制作した。粘土は足形を取り転写するための版にあたる。

本ライブでは、粘土を叩き壊すことで《Menuet Physique》の増刷を不可能にするとともに、パフォーマンスの一部として昇華していく。

# Drip! Drip! Drip

2023

グループ展キュレーション



当時のアルバイト先である八重洲珈琲の店主の「学生にお店を身近に感じてもらえる展示をキュレーションしてほしい」という希望から展示を企画・運営した。

作品は備え付けの可動棚を活用し設営。店舗の営業時間内での展示だったため、客席からキッチンカウンターを見たときに作品が鑑賞できるように工夫した。

コーヒーは、栽培・加工・焙煎・抽出といった各工程での差異が複雑に絡み合うことで味の個性を帯びていきます。今回の展示は、コーヒー文化の持つ「プロセスの差異を嗜む」という側面を展示のコンセプトに持ち込むことで、展示場所と展示内容の接続を図りました。ただ作品を展示するだけでなく、それらを制作した作家自身にもフォーカスしたテキスト(本冊子)を制作し、作品が生まれるまでの過程も垣間見えるような構成を意識しています。

(キャプション冊子より)



左から、稲垣佳葉「play [] ...」「うることばにかうことば」、阿部かのこ「お化けは自分の声を聴く」



左から、中村陽太「moiré」、佐藤伸輝「In a while...」、kamijō haruto「w/」「或る日 或る音 有り得る音」



客席にはキャプションの代わりにとなるテキスト冊子を用意。

(デザイン：稲垣佳葉)

場に合わせ喫茶店のメニュー冊子の形でデザインを依頼した。また、コーヒーが出来るまでのプロセスと作品が生まれるまでのプロセスを重ねるというコンセプトから、作家がどのようなルーツを持ち、どのような興味から作品制作を行っているか各々に書いてもらい、作品の概要とともに掲載した。

# Contact

## Web Portfolio

<https://www.chika1000.com>

## Instagram/X(Twitter)

@riceplant\_c

## Youtube

[https://www.youtube.com/channel/UC\\_TDzFOPbq2EsR7LY\\_32geg](https://www.youtube.com/channel/UC_TDzFOPbq2EsR7LY_32geg)

## Email

chika1000.17@gmail.com